

幼稚園の砂場にも爆弾

一花 一枝

昭和二〇年一月一六日の午後一時過ぎでしたか、私は勤め先の京都幼稚園のすぐ近くにある自宅の二階で、もう休もうかなと思っていました。私の家には姉と、女学校の先生をしている若い女性が住んでいました。この先生は動員で生徒をつれて伊丹の工場へ行っていたのですが、つい最近京都へ帰ってきたところでした。先生から、伊丹での工場の様子や仕事の話聞きながら床につく準備をしていると、飛行機の爆音が聞こえてきました。馬町一帯は敵機の飛行ルートに入っていたらしく、あのころは毎晩飛行機の爆音がしたものです。

あの日の爆音はいつもより飛行機の数が多いように聞こえました。しかし、敵機は一機でした。低空で旋回していたのです。いつもと違う飛行機の飛びかたに不安を感じながら、耳をすましていた矢先でした。バリバリという雷よりもきつい音がしたかと思うと、家中が震動し、同時に電気が消え、窓ガラスがメチャクチャに壊れ、冷たい風が室内に入ってきました。当時、すぐ近くの大学の寮で学年末の試験が行なわれており、灯がついていたために軍需工場と間違えたのでしょう。私たちは、危険を感じて一階に降り外に出ようと思いました。外はまっ暗闇で、寒気が肌を刺しました。私は幼稚園のことが心配で、暗闇の中を幼稚園へといそぎました。園舎より西の方、下馬町の渋谷通りの土橋あたりまで、火の手が上がっていました。私は



現在の京女馬町校舎南から北望

園長に連絡するため電話をかけよう
としましたが通じませんでした。その
うち警防団の人たちがかけつけてくだ
さり、火の手を防いでくださいました
ので、園舎に燃えうつる心配はなくな
りました。それでも、園の砂場にも一発
爆弾が落ち、爆風のため職員室の窓ガ
ラスが割れ、室の中はメチャメチャに
なっていました。私は宿直をしている
小使いさん親子のことが心配になっ
ていましたが、幸いけがはありませんで
した。しかしそのときのショックで、
一週間ほどたって小使いさんは亡くな
り、子供さんは別居しておられた母親
のもとへ引きとられていきました。被
爆のショックで亡くなられた方は、ほ
かにも幾人もおられたようです。

第三小松寮が被爆し学生がやられたと聞いて、私たちは救護にかけつけました。寮生が一人
負傷していましたが、とりあえず私の家に避難させました。救護班は近くの修道小学校になっ

ていましたので、その寮生は翌日そちらへ移しました。

爆弾が落ちてだいぶ時間がたって、馬町一帯敷か所にわたって火事がありました。おそらく冬の厳寒の折で、炬燵こたつの火が原因だったのでしょう。消火のため警防団の人たちがホースをおうとしましたが、カチカチに氷ってしまったので使えものにならず、仕方がないので手押しポンプを四条の方からもってきて、熱湯で呼び水をして使用していたのを覚えています。

幸い私たち家の者にはけがはなく、幼稚園の方にもけが人は出なかったのですが、非常事態の当時でも幼稚園で園児を扱っていましたが、もし空襲が昼間あったならと、いま思ってもぞっとします。被爆当時をふりかえるとき、けがもせずに生きてこれた幸福をひしひし感じますが、あのような空襲という大きなできごととに直面した場合には、人間業ではどうしようもないものだということを知りました。それでも避難訓練は役にたったようです。あのような場合には消すよりも避難ですね。あのような戦争という悲惨なできごととに巻きこまれて生きるとき、人の心に安らかさをもたらしものは、やはり信仰ではないでしょうか。私の場合信仰が心の支えになっていたようです。

まだ終わっていない戦争

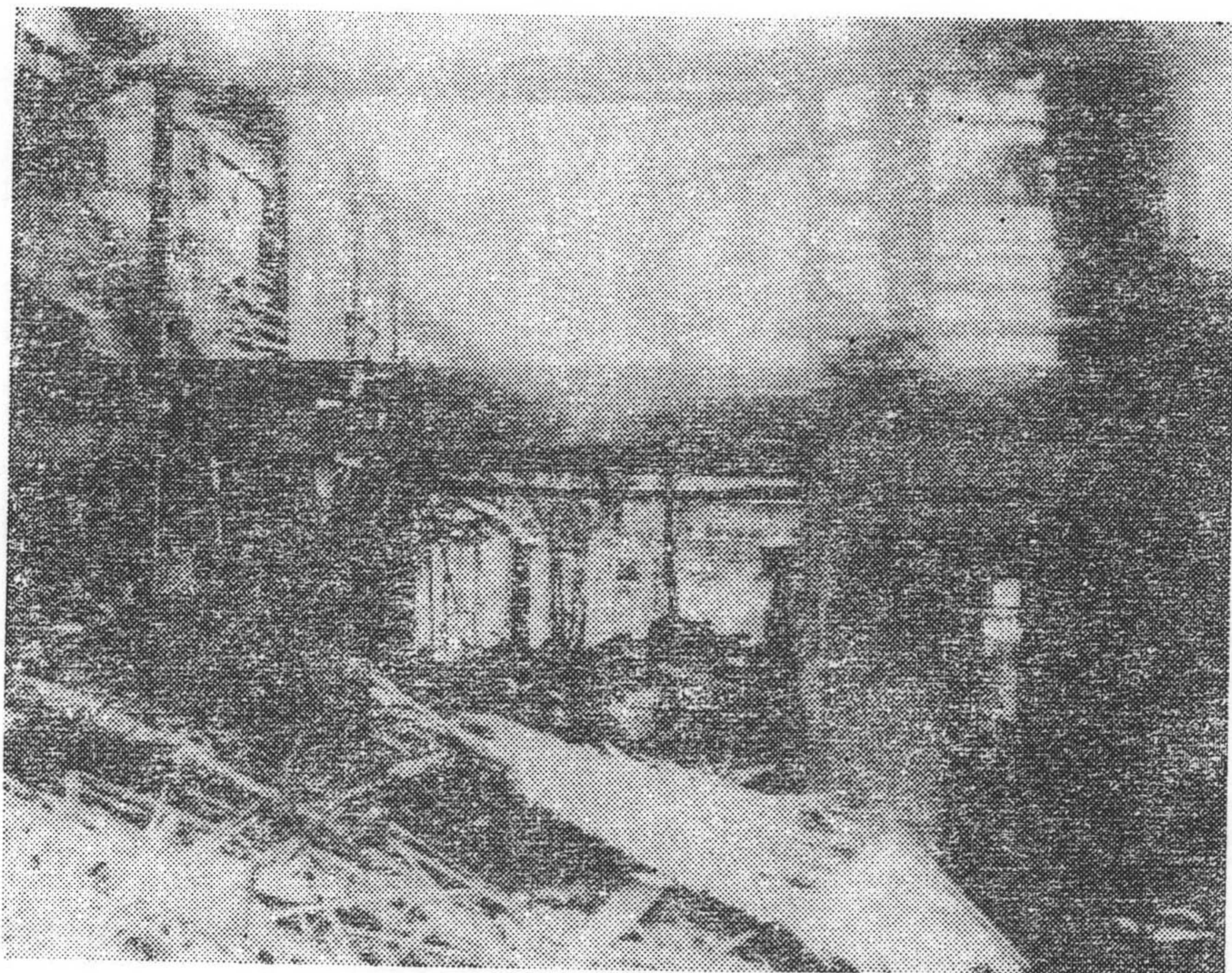
服部 繁次

私は昭和二〇年の空襲で妻と子供を亡くしました。夜一時半ごろ、ものすごい爆発音と同

時にたとえようもない激痛を覚えて、私は目を覚ましました。家のすぐ近所に、爆弾が落ちたようです。暗闇の中で部屋を見まわすと建具はみな倒れ、壊れた窓ガラスの破片がメチャメチャにとびちっていました。私は体中に激痛を覚えながら、同じ部屋に寝ているはずの妻と子供を探しました。妻と子供は重傷を負っているらしく、グツグツ泣き声もあげませんでした。

よく見ると妻も子供も爆弾の破片が、頭部に当たったらしく、脳みそが流れ出ていて、もう打つ手はありませんでした。まもなく妻と子供は息絶え、負傷した私は、救護隊によって府立病院へ運ばれました。妻と子供の遺体は妙法院（尼寺）へ運ばれました。

病院へ運ばれた私のところへは炊き出しは届かず、二日間は何も食べませんでした。そのとき私を見かねた荻原医師から牛乳を一本いただきましたが、あとでみかん二〇個、紙一締め、



下馬町東南部の民家

かんづめが届きましたが、差し入れ人は不明でした。

自宅のすぐ近所に爆弾が落ちたため、家屋がずいぶんいたみましたが、かわらがふつとび、穴のあいた屋根の修理は、あとで工作隊にやってもらいましたが、修理費をとられました。

それから、陛下より当時の金額で六円の下賜金をいただいたことを覚えています。

退院後の私は、同じ境遇にある人たちと被戦災者同盟をつくり、田舎へ買出しに出かけたりして、食料品を分けあったものでした。しばらく前に、京都駅前に非戦災都市の記念碑を建てようという計画が出てきたとき、「現に私たちのように被爆して、妻子を失い、負傷したものがたくさんいるではないか」と力を合わせて訴え、記念碑建立の計画を中止させたこともあります。

現在、私の身体の中にはまだ爆弾の破片が残っていますが、少なくとも私の場合には、まだ戦争は終わっていないのです。私の身体に爆弾の破片を残し、私の手の中から、かけがえのない妻と子供を奪っていった戦争。二六年前を回顧するとどうしようもなくなりますが、二度とあのような戦争の悲劇をくりかえしてはならないと思います。

第三小松寮にモロトフのパンくず

岡 本 隆 雄

その年の日記に限って見つかりません。あの時分は、心のより所も失い、それこそ全身虚脱で、残りものをあさりあるく野良犬のようにうろろとさまよっていたので、日記を書くどこ

ろではなかったのかも知れませんが、そんなわけで、多少事実と食い違いもあるうかと思いがお許しください。

昭和二〇年一月一六日、時刻ははっきりしないのですが、かなりふけていたのでしよう。米機が編隊で、南西から北東に向かって飛んでいく爆音を、床の中でうつらうつらしながら聞いていたように思います。すると、急に耳もとで途方もない大きな爆音が響いたな、と感じた。たん目がさめ、反射的に起き上がりました。冷たい風が部屋中に流れこんで、カーテンや釘にぶら下げた衣類をかなり強く吹き動かしているのに気がつききました。不思議に思っすかして見ると、締めたはずの西側の窓が開けっ放しになり、そこから北西の風が吹きこんでいました。急いで着替えをしようとすると、かなり重いガラス障子が二枚、さんだけになって夜具の上ののっていました。部屋中には微塵みじんになったガラスの破片が、散らかっているようです。「これはただごとではない」と暗やみの中で手さぐりで階下へ下り、身じたくをととのえ、宿主の原先生と一緒に学校へかけつけました。宿直員、使丁を起こして、校内錦華寮の巡視をやって、何事もなかったので、一安心して使丁室へ引き上げたところへ、「馬町へ爆弾がおとされた」「市田——通用門前の果物屋——が火事だ」「どこの家がつぶされた」「どこのじいさんがふとんの中でねたまま死んでいる」等々いろんな情報が入ってききました。原先生と相談して、本山へ連絡をとり、情況報告をしている所へ、金子先生があわただしくこられて「第三小松がやられて、寮生が下敷きになっている。」と告げられたので、さらに本山へ電話して現場へ走りまわりました。そこでは、もう警防団員や寮生が、見えない寮友の救い出しに必死のはたらきをしてくれていました。私らも、うずたかく積まれた柱、壁土、板片、かわらなどのとりのけを懸命に続

けました。だれかが、「この下で声がきこえる。」と叫びました。期せずしてみんなはそこに集まり、無事であることを念じつつ、折り重なった邪魔物をとりのけていきました。「いた、いた。」——だれかの声がした方を見ると、頭からすっかり壁土を浴びた一寮生が背中をまるくし、はいつくばるようになかったらで現われました。寮友は泣きながらかけ寄り、抱きかかえるようにして静かに立たせました。「よかったねえ。」と先生方もぞきこむようにしていたわりました。相当にうたれたようでしたが、外傷はかすり傷程度だったのでほっとしました。寮の各室の間取りが大変狭く、そこへ机、書棚そのほかの小道具類がおかれてあるので、こんな場合天井が落ちて直接に落ちないで、何かささえられてすきまが生じた事も結果としてよかったですでしょう。何しろ一瞬のことで逃げることもできなかつたのですが、一人の犠牲者もなかつたことは仏祖加護のみ力であり、不幸中の幸いといわねばなりません。本山からは執行長をしておられた朝倉先生も、深夜のことでしたが役員を連れてかけつけられましたので、小松寮の作業が一段落のあと、学校へ引き上げ、使丁室で朝倉先生を囲んで、善後策について話し合いました。

馬町 馬町方面の被災の程度、被災者数などは発表されなかつたのでわかりませんが、馬町通用門前の狭い通路を境として東の方、とくに南側は見渡す限り、家という家は全壊でしたが、使った爆弾が、焼夷弾でなく当時モロトフのパンくずといわれた小型のもので、全焼から免れることができたようです。

(「京女五〇年史」より転載)